

独標追悼登山に思う

白木建太郎

独標の標識を見、其処に立った時、込上げる涙を止めることは出来なかった。落雷事故から42年を経過した今、彼らの残酷な運命と無念さに感涙してしまった。42年前の昭和42年8月1日私は学校で剣道の合宿をしていた。私のクラスは2年7組。第1班で西穂高岳の集団登山の最中だった。私は合宿が有ったため、第1班から第2班に変更をお願いしていた。本来ならば落雷事故に会ったメンバーの1人になっている筈であった。合宿も一段落し休憩をしていた時に悲報が学校に入ってきた。最初は良く事情が分からなかったが時間が経つにつれ事の重大さ悲惨さが分かり、一部の生徒はラジオの放送を聞きながら泣いていた事を記憶してる。遭難救助にヘリコプターを飛ばし、被災者、遭難者を搬送していた。夕方になると深志高校ではすざましい雷が鳴り、土砂降りの雨が一時降り事故を暗示している様であった。私は堀江さんの遺体を校庭で受け取り担架で車に乗せた。其の時遺体は損傷が激しく寝袋で覆われていたが、足のあるべき場所には3本の棒のようなものがあった。おそらく千切れていたのだと思った。折井さんの遺体にも面会する事ができたが、残念ながら損傷が激しく顔はミイラのように包帯で包まれていた、最後の別れがこのような状況だという事が残念だった。彼らの死が、まだピンとは来ていなかった。

17～18歳の少年から青年期に移る世代には、精神的にこの事件は微妙に影響していた。

難に会った田近さんは体の何ヶ所も複雑骨折をしていたが、一命は取り止め社会復帰してきた。金子さんは3年生のとき自ら命を絶ってしまった。私も心には何か得体の知れないどんよりとした重苦しさを感じていた。2～3年は引き摺っていたと思う。大学に入り、社会人になり、会社に入り生活に追われた。落雷事故の事は忘れなかったが、記憶から薄れていく事は確かだった。何回か深志を訪れて参拝をしたが、8月1日は中々難しかった。同窓会に何回か参加したが、同級生も歳と共に人生の深みを増して来ていた。

私は体の元気なうちに必ず彼らの人生を奪った事故現場「独標」に追悼登山をし、この体と心で彼らの（辛い未練が残る）思いを感じずる事を考えていた。年齢も還暦に近くなり、人生の考え方にも少し余力が出てきた。今回の記念追悼登山の企画があることを知り、チャンス到来と心から喜び、申し込みをした。企画者の方々に感謝、感謝だった。

2009年8月1日雨模様の空だったが、高揚した気持ちで朝3時に起き、4時にタクシー、4時30分深志高校、5時に25名と共に新穂高ロープウェイに向かう。7時ごろ到着し、しらかば平駅よりロープウェイで西穂高口駅に向かう。到着後1時間30分ほどトレッキングし、霧の中の西穂山荘に到着した。「先発隊」はすでに登っている。我々「日帰り組」も体制を整え霧・雨交じりの中を独標に向かった。尾根はやはりかなり歩きにくい。久しぶりの登山は足腰に応えた。彼らもこのコースを若さで2時間で往復する予定だったようだが、今の私達ではかなり無理がある事が良く分かった。お花畑で「先発隊」とすれ違って更に進み、11時頃独標に到着した。岩を登って下りて又登っていく。此处で足を滑らせば確実に谷底に落ちていく。助かる事が無い。落雷を受けたらひとたまりも無いことが自分で登った事により体感、実感する事ができた。

なぜか涙が出てくる。止まらない。悲しいという感情なんだろうか？彼らの運命に涙しているのだろうと感じた。私が今ここにいるのも、きっと彼らの短い命の上に更に運命的に頂いた命だろうと感じた。来て良かった。運命とは紙一重であるものだと痛感した。

独標にて御線香を上げ、献花し、彼らの御霊に祈った。最後に校歌を斉唱し、別れを惜しんだ。お花畑では深志の現校長先生、山岳部、同級生、小林先生が、夫々追悼の言葉、お話を話された。毎年誰かが追悼登山をし、彼らの鎮魂をしてれていた事は大変うれしかった。ずっといたい気持ちにさせられたが、雨も激しくなり遠く雷の音が聞こえ、全員山荘に引き返し、追悼登山は終了した。

人生とは“人が生きる”と書く。彼らは短い命を彼らなりに、当然悔いはあるだろうが精一杯生きたのではないかと思う。人は喜怒哀楽を感じながら生きている。「人は生きて生かされて生きる」という事が言われている。自分が自分だけでこの世界を生きていると思ったら大間違いである。家族、親族、友人、社会そして運命に生かして貰って初めて生きる人生なのだと思う。私は運命的に生かされたと感じ、彼らの分もこれから生きていこうと感じた。“友よ安らかに眠れ”——長年の思いの気持ちの整理が付いた追悼登山であった。

松本に帰ってきたのは17時頃であった。「松本ボンボン」というお祭りというか、催事をしていた。雨交じりの中、世代交代を感じさせる元気さであった。18時より懇親会があり、久しぶりに同窓生の方々と色々な話を話した。楽しい時間を過ごす事ができた。幹事の方々が有難うございました。感謝の念で一杯でした。

最後に、私の思いの中には、この集団登山を、学校がああ事故の後完全に封印してしまった事に対しては、残念だと思う気持ちが強く有ります。確かに管理上の問題はあったかも知れない。しかし、それを言葉としての教訓として後輩に語り継ぐというだけでは不十分なのではないか。山の気高さ、怖さは、体験して初めて判るものなのではないのか。そうであれば、それを人生の教訓として体験し危機管理もできる後輩を育てる事（登山の再開）が我々の使命ではないかと思われます。どうか今後何かあれば臭い物には蓋でなく、直視し対応できる人材を、深志高校から育て行けるよう教育関係者の方々にお願いしたいと思います。

私も近々故郷に帰り第3の人生を送りたいと思います、どうか「極楽トンボ21の会」を末永く続けていってください。今回は本当にご苦勞様でした。有難うございました。

